

枕草子 第二回

その二 時節

時節というものが、正月、三月四月五月七月八月九月十二月と移り変わり、そうして一年が過ぎて行くのは、面白い。

その三 正月

正月一日は、ましてや、空模様がうらうらとのどかで、珍しく、霞が立ちこめたりするなかを、世の中の、ありとあらゆる人がみな、姿かたちや心持ちをちゃんと整えて、誰も彼もが、お祝いの言葉を交わしたりするのは本当に面白い。

七日には、雪の中から芽を出した若菜を摘んで、いつもは、そのようなものなどは目にすることなど無いあらたまつた所などで、みんなでわいわいと、青々とした若菜を見て騒いだりするのも、いかにも面白い。

五節会のお祝いの一つの、宮中でお酒を振る舞つてくれる白馬の節会を観にいきたくて、普段はそういうところには出入りできないような、まちなかに住む里人たちまでもが、清めた車を仕立てて観に行つたりもする。

車が中御門のところの、門を通る車の車輪が、がくんと沈むように彫込んである、門の内外を分ける敷居を渡る時に、乗っている人たちの頭が、いっせいに揺れてぶつかり合い、誰かの髪櫛が抜け落ちてしまつたりなどして、そんな思いもよらないことで櫛の歯が折れたのを見て、笑い合つたりするのも楽しい。

東側の門の左衛門の陣のあたりまで来ると、殿上人てんじょうびがおおぜい立つていて、その人たちに仕えて馬の世話をする舎人とねりに持たせてあつた弓で、馬を驚かせて遊ぶようすを、ちょっとと覗いて見たりした拍子に、ふと、目隠しに立ててある立蔀たてじぶの向うに、ご身分の高い主殿司どもづかさや女官などが行き交うようすが垣間見えたりするのも楽しい。いつたいどういう人が、どんな運が九重にも重なりあって、そういう身分になれるのだろう、とか思つたりなどもするけれども、見れば内裏は意外に狭くて、舎人の素顔のよいぶんと黒い肌も間近に見えて、白粉がはげ落ちたところなどは、まるで地面の雪がところどころ、むらになつて溶け残つてゐるかのようで、とても見苦しい。馬が暴れて飛び跳ねるのもなんだか恐いけれども、そんなことなども、危ないからと、車の中に引っ張り入れられてしまつたりして、あまりよく見えない。